小論文　　慶應義塾大学　経済学部　1/3

＜総括＞

試験　時間　60分	総解答字数　600字

有限な資源の最適配分と公平性・倫理性とは、経済学の核心となっているテーマであり、これをトリアージとアファーマティブ・アクションという具体的な場面で論じた文章を読ませて、分析させ考察させる問題。経済学的分析・思考の能力が試される問題である。

今年度は課題文が 2 つあり、それぞれそれなりに長く、異なった論争的なテーマが取り扱われている。設問Ａ・Ｂともにその論点の簡潔かつ要を得た要約説明を求めており、論争的で概念的な社会科学の論文に対する精密な読解力・言語的表現能力が試される。また例年と同様、短い制限字数でいろいろなことを解説し分析することが求められているので、設問のすべての要求を満たす解答を制限字数・制限時間内で構成するのはとても難しい。現在の生成ＡＩでは不可能なオペレーションが要求されている。

さらに、具体的事例を自分なりに挙げて論じることが求められている。普段からさまざまな場面で生じてくる具体的な「問題状況」に敏感かつ適切に反応し、これを有限な資源の最適配分と公平性・倫理性の問題として分析することができるという「感度のよさ」が試されているのである。

＜課題文の分析＞

大問番号	
内　容 （主題）	有限な資源の「最適」配分問題と効率性・公平性・倫理性
出　典 （作者）	松島斉『サステナビリティの経済哲学』岩波新書、2024 年 南川文里『アファーマティブ・アクション　平等への切り札か、逆差別か』中公新書、2024 年
長短・難易等 前年比較	長短（短い・やや短い・変化なし・やや長い・長い） 難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

＜大問分析＞

大問	出題形式	ﾃｰﾏ･課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント（設問内容・論述ポイントなど）
	課題文	学部系統的	A	説明	200字	課題文Ｉで言及されている「救命ボートの倫理」とトリアージの精神がかけ離れている理由について説明する。
			B	論述	400字	課題文Ⅱにおけるアファーマティブ・アクションの事例は技能や教育機会という希少な資源の割り当ての一例であると考えられる。課題文Ｉ・Ⅱに即して、アファーマティブ・アクションはトリアージと、目的、プロセスの面からどのように異なるのかを説明する。その上で、これからの社会において希少な資源の割り当てとして、どのようなものが考えられるか、理由とともに自身の考えを説明する。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」
※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」
※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

© 河合塾　2025 年

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

＜答案作成上のポイント＞

設問 A の要約は、課題文Ⅰのロジックを正しく掴んでいないと、正解に到達できない。課題文Ⅰによれば、環境、社会、経済の三つの側面を総合的に考慮することがサステナビリティの理念の中に含まれており、そして三つのうちの「社会」に関する視点からは、「誰もが機会と福祉にアクセスできる」という公平性の実現が不可欠である。しかるにハーディンの採る「早い者勝ち」の資源配分では、「緊急時においては、生産性や社会的地位が優先される」という経済効率性の論理が支配しており、上記のサステナビリティの理念に含まれる公平性という観点に背馳するのである。この課題文Ⅰのロジックを正しく追跡して解答をまとめなければならない。

設問 B について。要求が多岐にわたっており、まずアファーマティブ・アクションとトリアージについて、①目的と②プロセスとに関して、それぞれの特異な点を簡潔にまとめて対比しなければならない。次に③これからの社会において希少な資源の割り当てとして、どのようなものが考えられるかを、自分なりに具体的な場面を挙げる。その際「理由とともにあなたの考えを」という設問の表現が何を意味するか、いま一つわかりにくいが、おそらく③*これからそうした希少資源の配分が社会的に問題として現れてきて、社会的な論争の対象となるその理由を説明し、次に③ **その希少資源の配分問題においては、単に経済効率性だけではなく、公平性や倫理性といった観点でも社会が合意できるような解が選択されなければならない、ということを主張するということになるだろう。

上記の①、②、③、③*、③** のうち、①は簡単で、トリアージは緊急時における医療資源の最適配分を実現するためであり、アファーマティブ・アクションは社会の中に長らく存在する差別と排除・独占を解決するためのものである。②は課題文Ⅰ・Ⅱには必ずしも明示的に書かれていないため、自分で 2 つを対比させて読み込み、違いを概念的に説明することになる。トリアージは専門的知識と経験、高度な倫理性を有する医師に社会が委託して、ケースごとに医師が最適な資源配分を決定するというプロセスとなる。これに対してアファーマティブ・アクションは、社会が予め権力や機会を各人間集団に割り当てるという形をとり、その形式性（専ら人口比による等）・一般性（いったん決定された割当枠はケースごとに変更することはない）などにより「公平性」が担保される。このように説明していけばよい。

その上で③希少資源の配分問題を具体的に挙げるわけだが、③*、③**を論じなければならないから、現代の日本や世界が直面する問題から考えていく。日本に関して言えば、本格的な人口減少社会の到来、それに伴う人手不足というテーマが挙げられよう。また都市化が行きつく先として、農山漁村地域の高齢化・過疎化が深刻で、地域社会の維持が困難になったり、大都市周辺の郊外住宅地でバスなどの公共交通機関が人手不足で維持困難になったりするという状況が問題となってくる。他に、インフラの老朽化の問題、年金・医療など社会保障と財政負担に関する世代間の不平等という問題などが挙げられる。こうした問題において、財政資金や税・社会保障負担などに関してどのような割り当てが最適かという問題がつねに出てきうる。そうした場面を具体的に、かつ簡潔に挙げることができるかがポイント。

世界的に見てみると、真っ先に思い浮かべられるのは、ハーディンがコモンズの悲劇として言及した地球環境問題に関して、温室効果ガス排出枠のような割り当ての問題だが、これは課題文Ⅰである程度触れられてしまっているので、オリジナリティに乏しい。とはいえ設問Bで、「課題文でふれた事例以外で」という指定はないので、思いつかなければ地球環境問題に関するものを挙げてもよい。

地球環境問題以外で考えるとすれば、グローバル・ガバナンスの問題として挙げられるものを考える。たとえばトランプ政権がパリ協定離脱とともに掲げた WHO 離脱など。新型コロナ・パンデミックなどのグローバルに広がる危機に対しては、WHO を中心としたグローバル・ガバナンスが問題解決のための必要不可欠なのだが、その分担金や人的負担をめぐって、論争が生じうる。

③で適切な場面を挙げることができれば、③*、③**は難しくない。その問題が生じてくる構造と、経済効率性以外に公平性・倫理性が求められることを明らかにしていけばよい。

＜学習対策＞

従来の慶大経済学部が出題してきた小論文問題では、具体的な社会的状況に対して critical な意味をもつ概念が主題として採り上げられていた。すなわち問題性を孕み、現代の問題状況の分析に際してその概念の理解が重要な意義をもつような、そのような概念を、具体的な問題状況に即して考察することが求められていたのである。2024 年度入試の「社会科学という知」、2023 年度入試の「人間の意図的行動と合理性」、2022

© 河合塾　2025 年

年度入試の「集合知と多様性」、2021 年度入試の「支配的関係ではない非対称的な関係」といった諸概念はそのようなものであった。

本年度の問題も同様で、核心にあるのは、有限な資源の「最適」配分という概念であり、この「最適性」の定義が経済効率性の他、公平性や倫理性といったものも考慮されなければならない。このことを課題文Ⅰ・Ⅱはトリアージやアファーマティブ・アクションという具体的な施策に即して論じており、その論理の正確な読解と、具体的にはどんな問題状況が想定されるかを想起させ、その概念に即して問題状況を分析させる問題となっていた。

こうした頭の動かし方は、経済学という学問領域では必須のもので、これを身につけるためには、やはり定期的に社会科学の小論文の問題を解き、答案を評価され、問題解説を受講し、頭の動かし方を会得するという以外にない。

© 河合塾　2025 年